

暮らしの中のやきものにこだわりながらも、
 どんどん幅を広げていきたい

もりの・あきと 1969年、京都府生まれ。
 1993年、大阪芸術大学芸術学部陶芸コース卒業。1995年、京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。国内外で精力的に活動。2011年第22回タカシマヤ美術賞受賞、他受賞歴多数。



Information

高島屋美術部創設110年記念

森野彰人
 豊饒な文様

京都店 6階美術画廊

6月28日(水) →

7月4日(火)

※最終日は午後4時閉場

斬

新で装飾的なオブジェで高い評価を受けてきた森野彰人氏。その意識に変化が訪れたのは40歳の頃だった。「たまたま家に戻ってきていた祖父の作品と自分の作品が並んでいたんですよ。白磁の胎に染付けで馬が二頭描いてある、基本的な技術だけで作られた祖父の花瓶の存在感がすごかった。それからですね、できるだけ暮らしの中で使える『やきもの』を作り、その中で自分の力を出したい、と思うようになった

のは」。実はそう感じたのは初めてではなかった。大学で従来のやきものから飛び立つことを目指した柳原睦夫氏の薫陶を受け、また、個性の強い大学の諸先輩らの影響によって美術的な作品を目指すようになっていった。しかし、三代続く陶芸作家の家に生まれ、こども頃から物作りは得意だったにもかかわらず、独り立ちをするためにも父親とは別の仕事を、と考えていた。そんな森野氏が陶芸を志したきっかけは、予備校時代に

現国の模試に出てきた柳宗悦の「雑器の美」の一節だった。「名もない職人が作ったもので美しいものがたくさんある」と。同じやきものでも、父や祖父とは違う道がある、とその時に初めて知りました。新鮮でした。

暮らしや人と人との関係を豊かにしてきた。今の時代はその意味も存在感も薄らいでいますが、それをもう一度取り戻したい。抽象的な模様より意味のある模様のほうが、使う人も楽しいと思うんですよ」。そう語る口元がほころんでいる。「ゆくゆくは染付けの仕事もしたいんです。暮らしの中のやきものにこだわりながらも、どんどん幅を広げていきたい」。やきものと自らの志の原点を極めることで、新たな飛躍が始まっている。

Artist Clip



森野彰人

Akito Morino

使い手も作り手も 楽しめる“やきもの”

photo: Yasukuni Iida text: Yurie Kimura



1. 右:「瑠璃釉金彩龍濤 盃 2017」(径6.8×高さ5.7cm) 左:「白瓷色絵唐草文 盃 2017」(径6.8×高さ5.7cm) 2. 「白瓷色絵蝙蝠文 容 2017」(径19×高さ22cm)